

施設における世代間交流の特徴が高齢者にもたらす影響

池田 朝子

高齢化や核家族化が問題視される現代の日本社会において、高齢者と子どもといった異世代同士が交わる世代間交流の取り組みに期待が寄せられている。世代間交流は、異世代間の理解の促進要因としてや、社会問題の解決策として期待されているほか、高齢者の幸福感を向上させるなど心理的影響をもたらすことが明らかにされている。近年、世代間交流を行う施設なども増えている一方で、施設での日常的な場面における世代間交流の効果の研究や、高齢者自身の視点からの研究はいまだ十分にされていないといえる。また、世代間交流のかたちには様々なものがあり、介入プログラム型の世代間交流と、共生型の世代間交流では、高齢者による経験や高齢者への影響が異なると考えられる。

そこで本研究では、「地域共生型及び、介入プログラム型の世代間交流を日常的に経験する高齢者が、各場面でどのように子どもと交流し、高齢者自身はその交流をどのように意味づけ、評価しているか」、および「世代間交流に対する施設側の意図や職員の期待が、高齢者の行動や意識に違いを生んでいるか」の2点をリサーチクエスチョンとし、各施設における「世代間交流に対する意図」、「世代間交流の事例」、「世代間交流が高齢者にもたらす影響」の3点について、焦点を絞ったエスノグラフィーの方法をつかって明らかにした。フィールドとして、地域共生型施設の原点であるデイサービスと、介入プログラム型の世代間交流を日常的に行う幼老複合型施設に参加し、観察およびインタビューを行った。

その結果、地域共生型施設における世代間交流の意図として、「互いが目に入るところにいること」、「自然」、「みんなが楽しむ場・きっかけ」の3カテゴリーが、幼老複合型施設における意図として、「共育」、「特別な時間」、「選択」の3カテゴリーが抽出された。世代間交流の事例としては、「高齢者と子どもが互いを受け入れる」、「高齢者が役割を認識しできることをする」など両施設合わせて12のカテゴリー、74のサブカテゴリーが抽出された。世代間交流が高齢者にもたらす影響としては、「過去、現在、未来への関心」、「肯定的な感情」、「関係性の構築」の3カテゴリーが抽出された。

施設間で比較した結果、「施設側の意図」、「世代間に生じる行動」、「世代間交流が高齢者に及ぼす影響」の各項目で相違点が抽出された。地域共生型施設では赤ちゃんをあやす、見守るといった家庭的な交流が特徴としてみられ、世代間が互いに受け入れあい、なじみの関係性を形成していることが高齢者にとって、世代間交流の意味となっていた。一方交流プログラムを行う幼老複合型施設では、子どもと高齢者がともに楽しむといった交流が特徴としてみられ、高齢者は世代間交流を楽しんでいると感じ、気持ちに張り合いが出るなど高齢者の感情に変化を生じさせていた。

結果から、高齢者にとって施設での世代間交流は、生きがいや安心できる居場所となり、自尊感情を高める、高齢期の心理的発達課題である統合性を高めるといった可能性が示された。また、共生型とプログラム型といった世代間交流の形態の違いによって、高齢者への心理的影響や職員が担う役割に異なった特徴が生じることが示唆された。（臨床死生学・老年行動学）